



環境教育～人と自然の長続きするおつきあい～



▲安濃川
安濃川は、布引山地をすいげんとして、三重県津市市街地を流れ、伊勢湾に注ぎ込む二級河川。



▲三泗川
“短急流”である安濃川に設けられている遊水池。普段は農業用水であるが、大雨などで安濃川からあふれてきた水が、「三泗堤防」を越えて三泗川から岩田川へ流れることにより、その下流にある市街地への被害を防ぐ役割を果たす。

川と人とのおつきあいを
もっと強いものにしていきたい……

●環境教育

「環境教育」という言葉、ときどき新聞にも載っています。しかし人によってこの言葉のイメージはすいぶん違うようです。ある人は海岸のゴミ拾いを思い浮かべるし、別の人は教科書に載っていた公害問題のことを考えるというふうに。私は「自然と人間の長続きするおつきあいのための教育」だと思っています。自分の要求だけを一方的に押しついたり、相手の意向だけに従っているような関係は長続きしません。人間がどんな場面では自然に譲り、どんな場面では自然に譲ってもらうか、それをていねいに考えていくのが環境教育だと思います。

●川とのおつきあい

人と自然のおつきあいの場合はあらゆるところにありますが、その一つとして川があります。川の思うがままでは、川の周辺の人たちは暮らせません。一方で、人が川を思うがままにしてしまえば、川の自然とともに、川の恵みも失われます。日本では(もちろん他の国でも)、長い歴史の中で川とうまくおつきあいをするための技術や文化を育ててきました。私が世話役を務めている三重大学景観教育研究会では現在、そのような文化や技術を視野に入れ、さらに川を自然科学の目で見つめた分析を加えた河川環境教育のカリキュラムを構想し、教材を開発しています。そのための素材は安濃川に求めています。

●安濃川

安濃川は決して大きな川ではありませんが、それだけに人に近い存在で、古くから人の手が入り、大切にされてきました。折しも愛知万博(愛・地球博)では人と自然が共生するモデルとして里山が取り上げられています。それにならって言えば、安濃川は「里の川」とでも呼ぶことができる川で、人(文化)と川(自然)が分かちがたく複合しています。近年、川と人が切り離され、古いおつきあいだった両者の関係が見えにくくなっています。安濃川を舞台として、もう一度このおつきあいを見直し、強いものにしていきたい。私たちはそう考えています。



▲伊勢湾へ続く、安濃川河口



▲災害復旧工事により護岸工事がなされた安濃川(三重県警察本部前)

三重大学教育学部・助教授

荻原 彰 Ogihara Akira

[URL] <http://www.cc.mie-u.ac.jp/~lh20234/homepage.htm>